

昭和十六年一月一日

日中は元旦にふさわしい晴々とした天候。

若水を汲んで顔を洗い、国旗を掲げる。山根さんと二人で玄関をキレイにして、名刺受を出す。

九時頃、雑煮を食ふて正月を祝ふ。互いに「オメデトウ」の言葉もかはされた。望月・三木の両君は熟睡中。山根さんと僕とは、朝食後学校に行き、其れから先輩の所へ、御年始に出掛ける。

宮部先生、前川氏、青木氏、川村氏、亀井氏を訪問する。

広い僕の部屋で、菓子を食べながら話にふける。

「望月君は元旦早々、腹具合が悪く御気の毒であった。」

外は三十一日降った雪で、可成りつもってゐる。日が照って目が痛い。

晴着きた婦女子等、楽しそうに往来する。酒に酔った人もあまり見かけない、之も新体制の表れか？

夜、三木さん奥田先生の所へ訪問する。僕と望月さんとは、某家へおよばれ。

夜にはいって、雪は盛んに降り始めた。この分では明日はスキーも出来るだろう。三木さんの部屋で、蓄音器の音がする。十二時頃に、雪も止んだ。

附記 おひる頃、平井君おいでになる。御兄弟が小樽迄おいでになったとのこと。亀井さん、新潟寮から年始廻りが始める。

一月二日

正月の二日、雑煮を食ふ。

山根さん、実験で学校へおいでになる。仲々お忙しそう。

午前中、雪が降ったのでスキーの客が、電車で出掛ける。僕等も三木さん・望月さんとともに、円山へスキーに行く。

幌見峠で三木さんスキーを折って、一足先に帰へる。僕等は盤溪を経て、荒川山の方へぬける道をかへる。すばらしくよく滑る。

町は初売買でにぎわっている。

夜三木さんは外出。山根さんもお友達の所へ 多分スキーの御相談 。九時頃寝る。

舎はシンとして人気がない。僕一人。

「拓生記」

一月三日

四人しか居ない寄宿舍にも正月が来た。が何時しか通りすぎて行く。山根さんは、明日より奥手稲白樺春香の山々を巡り歩くと言って、三日間留守にするとの事。

三人のみの舎とは、何と淋しいことか。雪は吹雪で、相当の積雪らしい。三木君は、明日来りなばとスキーは折っても、張り切つてゐる。

一月四日

吹雪もやんだ。

廊下を歩む音、ドスンドスン、ピシャピシャ、がしゃがしゃがしゃ。世も眼を覚ました。山根・三木の両君、用意万端となったと云った形。三村・三木両君は、朝九時頃より幌見。山根さんはそれより一寸との間を置いて亦出発。雪は今一度、一しきり降り出す。小生は内職を早々にかたづけて、亦もや午後から幌見峠へと出かける。夜寒気厳し。

一月五日

山根さんもみない後の舎は只三人のみ。三木さんはスキー、三村君と私は寄宿舍会で。外は雪。今年も大して雪は少ない。

一月六日

三羽鳥は荒井山へ。疲れ果てて帰った後暫くして、山根さんが山から来る。余り澤山喰いすぎてエッセンが無くなり、予定を短めて帰ったと語る。それ故か、大変エネルギーに見える。晩は、山根・三木君は松竹に慰安を求めに。

三村君と私は、寿司に腹を満たしに行く。

(望月)

一月七日

昨晚おそく太田君、今朝小林君、晩に菅沼君、又十一時頃渡辺君と戸田君が、三宅君は上り列車で帯広から、九時頃見えたので、舎も以前の色彩も変わり。閉鎖を聞けるようになる。

(望月)

一月八日

八時半になるも未だ誰も歸らぬ。やはり山親爺いる北海道に歸ると思うと、寂しいだらうか。観兵式に三年生出る。

菅沼生

一月九日 晴、夕小雪

太田生

昨夜遅く、齊藤君・細田君歸舎す。

本科の方々は致し方ないが、川又・河辺・竹沢・塚越の四人の予科生未だ歸らず。

世の中は変わった様で変らぬものである。「各自が各自、自己に目覚め、自己の立場でベストを盡すこと」に努めたい。

津軽の海を渡った時、雁が一行になって飛翔したのを見た。歡喜と悲意を以ってながめやった。

偶

一月十日

晝の急行で塚越さん川又さん歸舎され後は四人残るのみ。

全舎生の 1/5 足りないだけでも随分寂しい。物事をして落ちつかない。戸田君小林君、遅くまでスキーに興ず。三木・塚越さん東宝へ。「宜かった」とのお話。

一月十一日 土曜日 曇

此頃一般に朝がおそいと思ふ。小母さんの御飯もおそいし - - -

大部遅刻した事だろう。午後、斎藤さん戸田君三村君と僕と円山へスキーに。戸田・三村君盛んにクリスチャニアの練習。

僕は坂の上迄行くには行ったが、下るに下れず立ち往生する事一時間と余分。その間寒さの為か、恐ろしさの為か足がふるふる。

山根さん以下皆明日の春香山スキー登山に張切る。「櫓の音」の原稿も近い中に集めるそう。やりたい事、やらせられる事が澤山あって困る。

夜十一時の急行で、竹沢さん歸舎する。

(細田)

一月十二日(日)

久し振りで殆ど一日一杯、雪が降り讀いた。

塚越・健・三木・三村・戸田・菅沼の諸君、八時の汽車で春香山へ。山根・三宅の二君は遅刻して、十時の汽車で後を追う。細田・斎藤・竹沢の三君幌見へ。夜三宅君の室で遅刻懲罰コンパを行う。こんなコンパは始めてだ。此れからはウツカリ寝坊も出来ねえ。あな恐しや!

一月十三日(月)曇

稍暖し。夜平山君・柳川君歸舎する。

新築の件、未だ確定せざるも極めて有望の模様なり。楽しかるべき最後の冬休みを舍のため奔走されたる平山君に対して、心から深甚の感謝を捧げるものである。

一月十四日(火)

もうれつに寒い日。ふろへ行った歸りに、手拭がびんと氷った。スキーに出かけるものかなりあり。

一月十五日(水)

昨日に劣らぬ寒さ。晝ごろからかんかんと日が照り出したので雪が溶けだしたが、やはり寒い。

二号室の傾いた煙突を三宅さんが修繕していた。

夜のシケ に せうが まへていた。川又君が風邪で熱を出した。

竹沢

一月十六日（木）

今日は二年工類はスキー教練で円山へ行く。

相変わらず粉雪、ボタン雪がふって寒い。

Y・K

一月十七日（金）曇

羽黒が勝ったとかどうかと云う話で夕食後にぎわう。櫛の音の原稿募集。何か書かなければいけない。

玉山

一月十八日（土）晴

予科工三のスキー教練で双子山に行く。気温高い為、雪質悪し。土曜日のこととて、中女小学生色とりどりに賑っている。舎生の大部分も荒井山、げんちゃん等思い思いにすべったり、行かれて来た由。フェミニンを交へてのカルタ取りの声が特別室の方から、ガランとした舎の廊下を響いて来る。内に外に土曜日の午後の舎の発展振りや目覚し。夕食後、新年コンパ。ささやかながら新年の集い、上ったり下ったり豊富珍妙な話題に時のつきるのを忘れる。

一月十九日（日）晴後雪

山根・渡辺・三宅・三木・三村諸兄及び僕と福本さんが手稲に行く。中々つらく、結局舎に歸ったのが五時十五分、舎の皆様にご心配をかけたそう。僕がへばったためにおくれたのは何とも申し訳ありません。それにしても、山根さん・健さん・三木さん・福本さん等の御親切誠に感謝にたへません。夜は登山組皆早く寝たようだ。 八号 小林

一月廿日（月）

【東京と札幌のスキー場の相違】

朝目をさましたら体が痛く、休養を要するのできれいに一日休んでしまった。ひっそりとした寄宿舍に、床に入って眠るともなく、醒めるともなく唯一人ぼーっとしているのは中々いい気分である。本日は下界と没交渉なので他に書く事も無い。

そこで一寸興味があるから東京附近と札幌附近のスキー場の相違を書いて見る。前者をTとし、後者をSとすると。

Tでは三四日スキーに行くのにすし詰め列車にゆられて十円も二十円もかかり、それがその年の始であり終わりである。Sでは僅か十銭で何時でも行きたい時に行かれる。Tでは、服装など華かで特に若い女などそうであるが、彼女等はすべて男と一緒に来ている。そしていくらきれいだと思っても、もうそれっきりである。Sでは女ばかりの微笑ましい一団がそこそこに見受けられる。そして彼女等に何時か又會へるかも知れないといふ楽しみがある。

Tでは殆ど、山の中の温泉である為に土地の小学生は殆ど居らず、大人ばかりであるが、Sではむしろ子供の方が多い。

Tでは、人が一杯で長い間自分の前があくのを待たねばならず、転ぶのが普通で、転ばないで止まる者がいると皆感心して見るのであるが、Sでは何時すべっても殆ど衝突の心配はなく、転ばないのが普通なのだから呆れる。Tでは立っている時も絶えず注意して、すべって来たら避けてやらなければならないが、Sではどんなにボンヤリ立っていても向こうでよけてくれるから心強い。

Tではスキー場へ行っている人々はすべてスキーヤーという一種の人種であるが、Sでは市民が誰でも行って楽しむのだから、スキー場の感じがよい。

Tでは雪の状態はどうであっても、とにかく満足してその年のスキーを楽しむのであるが、Sでは二三日の降らない後だと雪が悪いなんて中々ぜいたくな事を言う。 斎藤

一月二十一日

今日は雪。少しばかり吹いて、寒かった。平山氏、新しいスキーをかついで町へ。その中カンダハーで見へるでせう。夜二号室で会議が跳る。どうも室がすきまだらけでひえるのが早い。僕自身について考へるに、今年はいやな年らしい。国家も多事、舎は半多事。

一月二十二日

今日は少し風が強い。雪は此の二三日降らず。次第に雪は溶け始めて来る。これじゃ何だか心細い。日曜日には社内スキー大会との事だが、それ迄に一度新雪が降れば快適だが。

H・M

一月二十三日（木曜日）曇時々晴

雪降らず。二工はスキー教練で、双子山の氷の上をすべって来た。決算の結果、食費七十八銭とか。些か高きみである。特に変状なし。

河辺

一月二十四日（金）雪・雨・みぞれ

今年の冬は概して、暖かい日が多かったが、今日の天候は実にアブノルマルだった。今日は朝の中雪が降って、晝頃急に気温上昇して春の様な暖かさになり、道路の雪も大分融けた。夕方は思いついた様に寒さをとりもどした。

十五日間にわたって行われた相撲も今日千秋楽、七時のニュースに依ると幕内は双葉山が優勝したそうである。

（田村十一号）

一月廿五日

悪雪の為、明日のスキー大会中止となる。本日 生学会大会にて山根君優勝の由。物凄き雪なれどもスキーに出かけたるものも相当あった様子。

一月廿六日（日）小雪

今日は朝からチラチラ雪が降っている。近頃スキーヤーの待ちあぐねていた雪なので、殊に日曜でもあるので各スキー場はにぎはうことだろう。

余は山根・塚越・三木・斎藤・細田・戸田の諸君と共に、藤ノ沢スキー場に出掛け、大いに楽しむことが出来た。

舎のスキー大会も藤ノ沢でやれば面白くやる事が出来るだろう。

渡辺・菅沼・望月の三君は春香山へ。

田村・三村の両君は藻岩山へ。

玉山君は燃料のスキー大会へ。

戸田君の骨折りでスキー置場が整頓された。大いに感謝すべし。

T・H

一月廿七日

朝起きて見ると、昨夜の雪がかすかに人の足跡をかくしていた。昨日のスキーがたたって、今朝は節々が痛い。

小林君がスキー教練で、荒井山の方へ出掛ける。

午後、荒木貞夫氏の講演。“物資少なきを憂うるなかれ。頭から作り出せ”“仰ぎ似て、鉄を切るを計と言う”“戦の勝ち負けは計りごとによる”一時半から四時半迄の三時間、軍人らしい態度言葉で、講演せられた。我々の反省に値する事多し。（三村）

一月廿八日

【恵迪寮の新体制による将来への期待と寄宿舍の将来への不安】

先週の北大新聞に、予科恵迪寮の新体制に即応した新組織が発表されてあったのを見て、非常に羨ましく感じた。即ち生徒監の伊藤秀さん、宇野先生を初めとした予科の教授陣を中心とし、寮生が一丸となって肉体的鍛錬はもとより精神的の訓練・修養に乗り出した計画が発表されてあったのだ。かかるプランは昨秋から行われてきた事らしく、その効果はきわめて将来に期待すべきものである事を一部の寮生から聞いている。今迄の如く、何等の美点を存しうると思われぬ。自由主義的な生活から脱して、師弟一体となった新しき生活に入った点、我が寄宿舍も他山の石として見習うべき点あるまいか。現在の寄宿舍生活には外の目まぐるしい変化に対応する力の満ち溢れた生活が薄い様に感ずる。此の沈滞さを感じず生活になれきって了つたろうから生ずる倦怠さを感じず。生活の改善に考えるべき点あるまいか。

この点について俺の痛感する点は、舎生同志の精神的交わりの薄さという事である。或は寧ろ精神的交わりを深める為の集りの不足ともいった方が適當かもしれん。決して新体制の先棒をかついで騒ぎ廻るものでもないが、このままではとりのこされる様な気もする。

一月廿九日 水

暫く雪が降らなかったが、本日午後から降り始めた雪は、夜に入ると愈々烈しく電車さ

へ不通にする程の猛烈さであった。此の雪で山の積雪も、例年通り並になった事だろう。今週の日曜日のスキー大会も期待される。

一月三十日 異常なし 雪深

一月三十一日

「櫓の音」の原稿集らず。今日を締切りと云っているのに。四人しか呈出者が居ないのには、がっかりしている。

スキー大会のプログラム、リレーの組合せ等が発表された。運動部の人達も忙しいだろうが。文藝部も忙しくなるう。

二月一日

明日のスキー大会をひかへて、興亜奉公日に思う存分買物出来ぬのは残念であり、手落ちだった。

二月二日 【寄宿舍スキー大会の結果と舎の沈滞防止対策についての考え】

今日は舎のスキー大会あり。一同藤ノ沢へと出かけた。

八時半うつらうつらとなごりおしむ眠りを楽しんでいる時、突然がたがたと廊下を駆け出る幾多の響きに目覚めるを得ない。皆張切って出て行く。私は身体の不調の為残るのは残念である。

菅沼君は風邪を引きせきが苦しそうだが、昨夜買物に出たり、用意をしたり、亦今朝も早くから起きて歩いている。本日のスキー大会は盛大ならざるを得まい。

夕六時頃に無事歸舎す。三宅君はスラロームの覇者であるという。田村・玉山・山根の強豪を退けて覇をとげられたのである。

一月二十八日の三宅君の心持には、満腔の同感を授けたい。皆夫々忙しいのではあるまいか。沈思停滞することは進んでいることではないと思って、途を急いでいるのではあるまいか。(私自身そうである。座禅をせんと座っておつとめしてもいやされぬを感ずる。もっと徳をとなら変ると思う) 智識は求めれば求める程増々面白くなると思う。然し客観的事柄を求めるのも良いが、主観そのものを考えたいし忘れてはならぬと思う。我々の沈滞なるのも伸びんがための静止でありたい。

私は三宅君の説に対して具体案としては

讀書会の如き形式で(四~五名が適当だが多くてもかまわぬ) 相互に話し合う  
馱辨のみではなくて一つの主題の下に ことはどうだろう。

一月に二回位でも、大学の先生方に御願ひして一時間位の御話を聞く会を開くこと。食後直ちに行なえば一時間位なら何とか次の日の学業の妨げになるまいと思う。長々と馱辨らずにきちんとその時間を守ることによって、負担を軽くするこ

とが出来ると思う。時事問題の解説、人生問題、学生生活の問題、何でも問題は良い。亦大学の教授位になる人は、一般的な人々に比して優れた人格が見受けられる。かかる優れた人格の人々に御目にかかるのみでも良いではなからうか。夜もおそい。雪が降ってきた。外燈の輝きがゆれる。静かだ。あと授業の日数も二十一日を余すのみである。 四号室 太田

二月三日

今日は節分。外の家では豆でもまいて、「福は内鬼は外」をやっている事だろう。今朝は作スキー大会の疲れから遅刻したものが多い。全日本神宮スキー大会を明日に控え、札幌の町もスキーを担いだ人が沢山歩いていると、町中活気がある様に見受けられる。夜外出する舎生多し。映画化？

二月九日 晴

舎生十三名は手稲登山。ネヲパラより寄宿舍迄を見事に走破す。夜、鈴木先生を混ぜて、宮部先生よりの御高志によるスキ焼に舌鼓を打つ。素晴らしきかな一人五十匁の肉。

二月十日 午後吹雪く

二月十一日

予科生大部分スキー行き。学部は学問。

二月十二日（水）

七時五十分の急行で細田君歸舎。

二月十三日（木）

送別会に先輩を招くため、皆あちこちにとたまわる。かなり大勢の先輩がこられるらしい。桜林さんは病氣療養とのこと。

東京も雪が三四寸ふったとの入電あり。

竹沢

二月十四日（金）

櫻星会政報国会の創立式あり。学校は休み。天気は曇時々晴れ。

二月十五日（土） 【卒業生送別会と卒業の感慨】

午後五時から卒業生送別式。六時半から送別晩餐会が開かれた。逢坂・鈴木・青木・前川・奥田・時田・花島の諸先輩が御出席下さった。

宮部先生は軽い御風邪気味で、鈴木先生が代わりに宮部先生の送別の御言葉を讀んで下

さった。

先生の送別の言葉を頂き、舎生諸君に物資不足のこの時に盛大な送別会をやって頂いて、今更ながら卒業する。学生生活と別れなければならないと云う感じを深くしました。

晚餐会后、食堂のストーブのまわりで思い出話等を駄辨る。札幌三大スロープの一つの青年寄宿舍スロープの事、食事部の事。色々と遅くまで話がはずんだ。

我々卒業生に結構な記念品を下さった上に、委員の方の御骨折りで盛大な会を開いて下さって、本當に有難う御座居ました。

ひょっとすると之が舎の日記を書く最後かも知れないと思うと、ますます惜別の感を深くしました。後に残る舎生諸君、新しい時代に有意義な学生生活を御送りになるよう御祈りします。

玉山

二月十六日（日）

前夜来の雪に誘われて、元ちゃんに行く。学期試験が二十八日に始まるので、もうこれが最後のスキー行きか。三宅・望月・河辺の三君と一緒にだったが、斎藤・竹沢両君も来ていた。すでにシーズンオフの感じ。

二月十七日（月）

九時頃、太田・小林両君と一緒にスタートコンパに出かける。寿司屋に三軒ふられていささかくさる。

二月十八日（火） 【予科生活の最後の感想】

試験が早くなったせいか、もうあと一週間で予科の授業を終わるかと思うと、さびしい気がする。勝手気儘なことをやれる予科生活のような生活ももうくることはないであろう。何ものかを得んとし、あちこちに迷った生活ながらも、思い出の多い生活であった。私はただ三カ年間に於ける求めんとした意欲のみを以って自ら慰めている。

二月十九日（水）

異常なし。皆元気。

二月二十日（木）

めったにない暖かい日。雪が大部とけた様だ。町を歩いていると、いつしか汗をかいている位である。

予科はあと一週間後に試験をひかえ、相当晩おそくまで張切っている。切に大奮闘を期待す。

小林

二月二十一日（金）

別に異常なし。試験が近づくとこの一晩中だべる。日記は舎生の生活の生き生きとした貴重な記録であるから、誰もが早く接したく、廻ってくるのを待っているのだから、毎日一人づつが責任を持って書き、責任をもって廻すべきである。近頃度々停滞する事があるが、こういう事はしない様にしよう。

二月二十二日（土）

予科試験時間番付発表さる。午後からも猛々吹雪、すきま風がきもちよく身体をひやす。大したこともなく一日暮れる。夜決算。

二月二十三日（日）

舎費少なくていささか嬉し、スキーに行くもの二三あり。 （河辺）

二月二十四日（月）

舎生全部勉強以外に何も無いという状態らしい。 （河辺）

二月二十五日（火）雪・曇

数日来大分暖くなった。降る雪もみぞれに近い。予科の授業は今日で終りである。予科修了の三年生にとっては感慨深きものがある。二十八日より試験で忙しそうである。 （十一号 田村）

二月廿七日

予科生諸兄、明日より試験との事で大勉強。しんとせる真夜中の寄宿舍に、猫の聲のみさびしく聞ゆ。

二月廿八日 【卒業にあたって六年間の北大生活のよさ】

大学生活最後の講義を終わった。一生学生という時代は去ったのか。十七年間の学窓生活を省みて感無量なり。

天候の加減が気まぐれだ。春雨がしとしとと降り、雪は日増しにとけて行く。北国の春は雪解けに感ずる。

六年間就しかつた雪と、札幌の町と、雪解けの其小の如くお別れする日も近い。

楽しく、そして悩んだ大学生活は印象的のものである。解けざる仮の山脈、手稻の山は私の若き日のピラミッドである。

試験が終れば、美しいあの北国の春が又くる事だろう。美しい自然と理想の中に生き得られる北大の生活程恵まれた生活はもはや我には再びめぐり来ない。

後からくる諸君よ、自然と理想の中に生きて、北大の“よさ”を理解してほしい。 Y

三月八日 【卒業生離別コンパと贈る言葉】

三月一日より書いてないが、大体思い出すまま要項を書こう。

三月一日・二日・三日四日・五日、連日予科試験。学部実専も三月三日次から試験始めたらしいが、のんきそうである。

五日予科試験終り、六日夜離別コンパ、感激的な別離を味う。

唱う「蛍の光」、「別離の歌」も特別に身にしみる。

では卒業生諸兄よ、元気に行って呉れ。感傷にのみふけて「さびしい」とかなんとか云うのは、少女にでもまかして置いた方が良い。良さとか美しさとかいうものの時代ではない。それは円熟した時代に味わうものである。唯この時代には、たくましく建設的に進むことのみが望まれる。

では諸兄、各意とせらるることに真面目にたくましく生きられよ。

三月七日八日

予科生は試験も終了して、のんびりしている。風呂に入って良い気持ちになったのも、束の間体力増進にと、奥手稲山の家に登山。

実専学部の人達は、未だ暗澹たる日を送っている。三宅君は年甲斐もなく、家の都合で、ドワブに帰郷。恥ずかしそうだった。

三月九日、十日

九日 奥手稲に行ける人々歸る。

十日 太田君試験終了。午前斎藤・戸田・三村の三名歸舎。

十一日 小林君試験終了。朝、健さん歸る。

三月十二日

菅沼君帰省。小林君、晩亦。

細田君の試験にやつれた姿を見るにつけて、山根さんのナイトキャップをかぶっている、試験後のくつろいだ恰好が嬉しそうである。

三月十三日

予科、試験発表が行われる筈。

「戸田家の姉妹」を細田君・山根君二人して見に行く。他の人は、卒業で忙しいのか顔も遂に見ない。柳川さん等、小生よりも早く朝飯を食う。予科成績発表。

三月十四日

僕を除く外の人達皆のんびり。つられて僕ものんびり。

平山さん定山溪から歸らる。

よる農学部と同窓会に三人出席される。太田さん二週間の入院にそなへて栄養摂りに「スシ」屋へ。晩御飯喰べたのは僕と山根さんだけ。淋しい限り。老小母さん・男の子供発熱す。

三月十五日

朝十時で望月さん歸郷。本日晝飯都合に依り出来ないとの由。小生最後の試験をごまかして過す。

Freiheit! 街・映画・シルコ屋、あらゆる所が待っている。が、これらに見向きもせず歸舎。柳川さんと山根さんと最後になるだろう銭湯へ。

学士会がグランドホテルで開催され、卒業生諸兄出席。

夜は「センダ城」姉妹に夜食をサービスされる。誰かに悪いかな？

夜舎に残る者、小生一人。淋しさこの上なし。

老若小母さん・子供・センダ城姉妹病院へ。

三月十六日

極めて暖かし。道は泥濘と化す。

平山君、田村君は山鳥先生の御接待。柳川君、會。

夜細田君懐しの故郷へ。小母さんは気管支炎、子供は肺炎で、本日は飯無し。

三月十八日

風強し。田村君論文完成。夜は乾杯と映画に出かけらる。平山君・小生は副舎長室にて、朝十時目を覚ます。

柳川君と小生、午後スキ焼きの材料を買い来り。夜は大饗宴を開き、柳川君は映画へ、小生は宮部先生宅。

午後三時半太田君 Coecum mobile のため柳外科に入院す。夜食事する者柳川・山根。

平山君夜は會。玉山君もいずこへか。

十一時より小生、室（五号）にて駄喋り始まる。メンバーは駄喋りの権化、平山・柳川・池谷の三氏と小生。四時で遂に沈没して就寝。平山君と小生は五号室にて返り寝の枕。

三月十九日

雨終日降る。九時起床。田村君を除いては全部床中にある。太田君を訪問。入院手続き終了。至極元気。帰って見ると平山・玉山・柳川三君未だ駄眠を貪る。全部起きたのが何と一時過ぎ。午後に至り雨勢激し。夜十一時半列車にて、玉山君歸省する。平山君は荷造り。夜食事者なし。

三月二十日 曇

ウスラ寒き風。午後二時半太田君盲腸手術完了。極めて元気。米取りに行く。(舎二日分、賄五日分。)

柳川君論文呈出。夜柳川君と同室にて寝る。

#### 三月二十一日 曇

午後突如小雪あり。午前十時五号室にて、柳川君と共に目を覚ます。暫時にして平山君来り駄喋る。

午前、太田君を見舞う。元気なれども微熱ありて、ガス腹に溜まりて不快らしい。午後、柳川・平山両君と共に森キャンにて晝食をとる。午後五号室にて駄喋る。

夜平山・山根は宮部先生の招待に与る。帰舎十時。五号室に柳川君の友人三名来り賑なり。星の爺さん荷造りに大多忙。

#### 四月六日 日曜日 雪

帰省者のトップをうけ給わって帰舎する。一番最初に帰省した事に対して些か肩身の広い思いがする。六時半帰舎。余り早い為かおばさん未だ熟睡中。裏からごそごそ入っていったら、小さいおばさんが目をこすりながら来た。

八時、顔を洗ってたら予科の岩瀬教授来舎。一人新丸の入舎を頼みたいと。山根さん未だ帰舎されぬので確答を避け、別日でも本人来談の上、御返事を差し上げたい旨答えておく。八時半小林、元気一ぱい帰舎。十二時の急行で新角の姿も凜々しく塚越帰舎する。彼スプリングを着てめかし込んでたが、北海道は未だ寒くて気の毒。

書き忘れたが、太田君昨日盲腸手術終わって退院され寄宿舍に在り。夜、乙っちゃん帰って来るかと思って駅に行ったら、待人不来。思わぬ獲物が網にかかった。之れ即ち、新角健さんなり。彼氏もうすっかり角帽になりすました様な顔をしていたが、驛に待機していた予科ボーイに野次られまっかになってた。

十一時の急行とまってたが誰も来ず。今年は舎生の帰りが遅い。果たして明日何人来るやら。

#### 四月七日 月曜日 晴

本日晴れる。春らしい日。此んな日に新角でも被って町にでも出たらさぞ愉快的事だろうと夢想したら、健さんも塚越も同じ様な事を考えているらしい。合議一決、晝からおばさんに留守を頼んで町へ。

各人各様に愉快的半日を終わって舎に帰ったのが、七時も近い頃だった。その太田君、二時半に定山溪へ行かれたとの事。外出中山根さんからの手紙を得る。新築の件で帰舎遅れるとの事。御苦勞なる。後は云うまでもなく引きうけた。頑張って下さい。

夜七時五十分の急行で、新角菅沼、二年目三村、三年目望月帰舎する。何うやら寄宿舍も賑やかになった。皆其々元気。

石炭節約で昨日も本日も一つの部屋だけストーブを焚いて、集ってだべってる。昨日は俺の部屋、本日は健さんの部屋、殊に本日は舎の新角四人を中心にして、漫談の花を咲かす。十一時、戸田君すっかりいかれた顔に一杯いかれた話をもって帰舎する。本日も終日新丸の来訪受けず。些か心配になる。

四月八日 曇

予は本日、新角最初の出校なり。講堂に集って、事務の人にさんづけで名前を呼ばれて、くすぐったい感であった。街は新丸のはんらんで賑っている。十一時頃戸田君の友達で小林君が来られ、入舎ときまる。昨日、今日は寄宿舍生の部屋引越が行われ、あわただしい感がみなぎっている。晝の急行で竹沢君帰舎。

午後田村さんが背広姿も颯爽として来られる。今日札幌に着かれたとの事。色々の話しあって、三宅君が今夜のコンパを提議した時、さすがサラリーマン、コンパ代としてじゃかん下さる。我等大いに張切ってエッセンさがしに、街に出かける。夜八時頃から、田村さん歓迎、太田君送別。新入舎生小林、岡本二君歓迎コンパがしめやかに開かれる。言い後れたが午後、学生課と厚生部の人々が新丸二名つれて来る。高師附きの某君と、化学工業の岡本二君で両君入舎をきましたが、あとで某君の方、ケイテキ寮の方へ行くので断りに来る。結局、前記の如く今日の入舎生、岡本・小林の二君であった。今夜はピンポンに興じたり、コンパも賑やかに行なわれた。

太田君の九時十七分発の帰郷列車には、踏切迄皆で出て、見送る。太田君よ、大いに元気でやってくれ。

朝三宅君と二人で昨日学生課の人が来舎されたその答礼のため、学生課に出頭。代用食、新入舎生のことに関して相談して来る。多量の卒業生を出した後で一寸淋しいが、新入舎生仲々心臓も強そうで頼面しい。

四月九日

予科最初の勉強が始まる。三年目の斎藤、河辺の二君の姿は未だ見えぬ。

新しく白崎君入舎する。田村氏の荷物は便利屋が運搬して行く。舎の中の空気は動揺して、少しも落着かぬ。早く大コンパが過ぎ、特別旅行になればよい。残雪の汚さにはやりきれぬ。

四月十日 曇天 寒し

夜半のストームの名残は静まった様子だ。河辺も昨晚、疲れて帰って来る。斎藤は十二時頃帰る。

四月十一日 曇 風あり

新丸を連れて出るにも未だ道は悪いし、風もあるので一寸へきえきする。

五人の御大連の出たあとの舎は、実に火がきえたかのごとき観があるが、現在の新角諸君は、大いに張りきっているからすぐに又先のように活気をふきかえして、かなり刷新された舎となってゆくであろう。

早く副舎長がかえってこない、新旧の呼吸がうまく合わないし、どうもしっくりしなくてこまる。核を失っているようで新発足の第一歩が、力づよく踏み出せないような気がする。

遠友夜学校のオジサンの話によると、賄人の代りがあるそうだ。

竹沢

四月十二日（土）晴

晝は十二三名のものが街へ出かけた。後は僕一人だけ。一人しかいないのは実に淋しいものだ。晩三村君の室で、三村・小林・白崎・岡本の諸君と僕とで心行くまで寮歌を歌う。十一時頃迄、明日の手稲登山の準備に忙しい。

四月十三日 日 雨

新丸二人・三宅・塚越・渡辺・望月・小林の七人、八時の汽車で手稲にゆく。

十時の汽車で戸田来る。不幸、雨に降られ頂上をきわめる事断念したが、皆元気一杯。

殊に新丸の意気、猛烈で一同揃って一時四十一分の汽車で帰札する。

夜、山根大将帰札。コンパの用意をしたので八時半から新丸四人（本日兼平入舎）の歓迎の意味を込めてのコンパを開く。山根さん帰ってどうやら舎の仕事も本格的に動き出せる。 十時閉会

四月十四日 月

夜、二年目の連中新丸を連れて町に出かけたらしい。運よく町の或る喫茶店で舎の新角某が、浮かれているの出会い大いにたかったとか。新角はつらいとは其の某氏の告白。

二年目大いに活躍し、一年目の指導振りは天晴れ。今後も大いにやって呉れ。

四月十五日 火

春とはいえ、未だ寒い。本日の寒さ可成りなり。舎のコンピ一部変更。新丸入舎の余地、猶二人あり。待っていると仲々来ぬものだ。世相の皮肉な一面か。

三宅

四月十六日 水

そろそろ一学期も本格的になってゆく。予科生（誰か曰く、予科ボーイ）勉強か。大分舎の中静かなり。寒い日未だ続く。憂鬱成り。

四月十七日（木） 星あり

夜、風強し。十二号室でコンパあり。召集解除の若松先輩のお菓子を喰ったのである。

白崎